
ヒナギク・雪路の過去

arutema

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギク・雪路の過去

【Zコード】

Z4591H

【作者名】

arutema

【あらすじ】

桂ヒナギクと桂雪路。一人の過去をオリジナルで制作した物語。最初と最後の回想以外の部分は、ヒナギクがナレーターをしていふと解釈してください。

(前書き)

なんか無性に書をたくさんなりました。

「一度と経験したくなことがある。それは、私達ひとつでは信じられないことだつた…。

某日某日。分かるのはその日、ヒナギクは5歳で、雪路は18歳だったこと。その運命の日の朝。

「ねえ、お父さん、お母さんへどうして話わないの？」

この口と前の口の親は不自然だった。何か細かいことでも壁間に附着したり、会話なんか以ての外だった。

「わうよ。お父さんとお母さんがそんなのじゃあ、いつかの調子も狂つちやうわよー。」

ヒナギクに次いで雪路が続く。

「……」

なぜか両親は泣き出す。

「ひょい… 妻さん、なんで」「んなじ」と泣くのよー。」

父親も辛うつな表情だ。今考えると、それはある意味での愛情だつたのかもしれない。

「…」「うん… なんでもない…。あ、もつ」「んな時間よ… 一学校行きなさいー！」

「あ、うん」

雪路もヒナギクもこの日、何かが起きるとは容易に想像できた。しかし、それが何かはもうちろん想像できることだった…。

ヒナギクと雪路は同時に家を出た。

「ヒナ、今日の父ちゃんと妻さん、おかしかったわね」

「うん、私もそれ思つてたの」

「何のかしらね…」

「あんなに激しく喧嘩する人じゃなかつたのに…」

「まあ、私達が考えても仕方ない」とよね。いつか、戻るわよー。」

「わづよね、お姉ちゃんーそれじゃ、行つて来ますー。」

「道草食わないで幼稚園に行くのよー。」

「うふー。」

雪路は自転車で、ヒナギクは歩いてそれぞれの目的地に行く。ヒナギクの通う幼稚園は、およそ200メートルしかないから、5分足らずで着くのだ。

「おはようございますー。」

いつも通り、幼稚園の先生に元気よく挨拶するヒナギク。

「あら、おはようー。」

幼稚園の先生は、少し驚いていた。実は、すでにヒナギクは幼稚園を移るように、雪路はやめさせられていたのだ。幼稚園を移るといつても、もちろん次などない。一方の雪路は。

「おはようございますー。」

「あれ? 桂、なんでこの学校來てるんだ?」

「はー? 来ちゃいけないのー? なんですよー。」

「いや、お前じゃなんだ知らないんだ?」

「は?」

「お前の親が、雪路はもう学校をやめると聞いたんだ」

「な…なんですか?」

雪路は急いで家に戻る。そのとき、すでに親の姿はなかった。

「父ちゃん、母ちゃん…?」

ふとテーブルにあった2枚の紙を見る。

「ん…一枚は、手紙?」

そこに、こう書かれていた。

『ヒナギクと雪路へ』

本当に「めんなさい」。私達は、あなたたちを育てられる状況ではなくなつてしましました。これからは、この方と住んでください。

父・母

紙がもう一枚あったことに気付く雪路。

「じ、じいじ…」

「何これ？……借用書…？しかも… 8000万！？」

雪路は書かれていたことの意味をだんだん理解してきた。つまり、
借金返済のために売られたのだ。

「…」

じぱりく果然としていた。しかし、そんなことをしている場合では
ない。

「ヒナガ…」

ヒナガクは幼稚園を出でているのだろうか？いや、それならすぐに帰
つているだらう。どしどして、ここにくるのはまずい。

「早いと、逃げなきゃ…！」

雪路は家から出る。ふと振り返り、家を見る。

「…やよつねり、今までありがと」

そう言い残して、雪路は走つて行つた。

「はあ…はあ…」

雪路はなるべく家から離れたところに行つた。

「あー！」

「な、何？」

「する」ことがなく歩いていると、ある女性に会つた。

「あなた…学校は？」

見知らぬ人だつた。しかし、雪路は制服姿だったから、そう思われるには当然だが。

「あ、いや、その…」

「ハア、ハア…探したぞ、桂…」

「先生ー！」

「え？ ジヤあこの子、あなたのクラスの生徒なの？」

「じゃあこの人は…先生の奥さん！？」

「ええ。でも、びっくりだわ！」

「そんなことよつ、なんでやめたんだよー。」

「知りないわよー。知らない間に学校はやめさせられたの、金押しつけられるわで…」

「まあ…」

「つたくべ、お前、ちよつと俺の家に来い

「は？」

「住まわしてやる。家ないんだる」

「…じやあ、お願ひするわ

「あ、そろそろヒナを迎えに行かなきゃ

てなわけで、雪路は夕方まで先生の妻とこひこひ話していた。

「ヒナ？」

「妹なの。幼稚園にいるから

「分かったわ。じゃあ、行つてらっしゃい

新しい家。

といひの変わつて幼稚園。

「ヒナー。」

「あ、お姉ちゃん！」

何も知らないヒナギクが、明るい表情で雪路の元に来る。

「ヒナ、父さんと母さんね、外国に行つちゃつたの。だから、その間、別人の家に泊めてもらつからね」

残酷すぎで、本当のことなど言えなかつた。

「あ、それで喧嘩になつてたのね。なあんだ。じゃあ、そこに連れつづてー。」

「うーんよ。覚えておいてね。ただいまー！」

「おかえり～」

この人が、ヒナギクと雪路の義理の母親だった。

「じゃあ私、出かけて来るわー！」

「ちよっと雪ちゃん！ 行っちゃった…」

「…」

それから、ヒナギクと雪路のクラスの先生の妻は、話していた。

雪路は、借金をなんとかしようとthoughtしていた。

「あ、もしもし？ 悪いけど、お金用意してくんない？」

雪路は友人に頼み込んだ。しかし、それでもたかが知れている。仕方ないから暴力団に加入したふりをして、頭のキレのよさを使って大金を手に入れた。そして、貸し主に返した。

「なんとかなったわね… 隨分減ったわ」

そう、もう借金は友人から借りた分だけ（約200万）になつた。

その分は親戚に出してもらつた。その分は、雪路は教師の資格を手に入れて、1年かけて働いて返した。

ある日。

「ねえ、お姉ちゃん」

ヒナギクが雪路を呼んだ。

「何?」

「お父さんとお母さん、こいつ帰つて来るの?」

「……が、まあしばらへ無理つて言つたから……」

「お姉ちゃん……なんで本当のことを教えてくれないの?」

「え? ……」

「昨日、私、聞いたのよ。あの一人が話してたの」

「ヒナ……」

「確かに私は何もできないよ。でも、事情くらい説明してよ！お姉ちゃんが辛い思いをしてたの、知ってるんだから」

「ヒナ、ごめん。でも、私だってヒナに心配かけたくなかつたし、それに、こんな残酷な話、話せないわよ……」

「……でも、嬉しかった」

「え？ 何が嬉しいのよー私達は捨てられたのよー」

「ううん、そつちじやないの。お姉ちゃんが…私を見捨てなかつたことが嬉しいの…」

「…」

こうして、私達は新しい生活になつた。でも、まさか私達と似た経験をした人がまだいたなんて…。しかもその人は、ずっと一人だつたらしい。だから、誰の助けも借りずに生きていた。本人は慣れていると言つていたが、それほど残酷なことはないと思う。だから、

伝えてあげたい。

『人と協力することは、とても素晴らしいことなんだよ。あなたにも、それはできるはず。なぜなら、私にそんな思いをさせてくれたのは、あなたなのだから。』

と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4591h/>

ヒナギク・雪路の過去

2010年10月9日15時04分発行